

感謝の念を呼び覚ます

歴代誌上 16:1-7

主題 礼拝において神の出来事を物語っていくことで、感謝の念を呼び覚ます

1

本論1 礼拝において、神への感謝の念を呼び覚ます

今朝の記事は、エルサレムで主が導かれた礼拝を表わしています。

(東京神学校というところで、礼拝学を担当させていただいているのですが、そこで学生の方々と何を学ばせていただくかという事です。それは、...)

神の箱を天幕の真ん中に置いたということは、何を意味していますか？神の箱は、十戒が刻まれた板が納められているのですよね。そして天幕は、神さまの臨在を象徴するものですよね。十戒を納めた神の箱を神の臨在の象徴である天幕の真ん中に置いたということは、それは、「出エジプト」という奴隷の状態からの解放があって、その上で解放された生き方が示された十戒が、わたしたちの礼拝と礼拝堂の真ん中に位置づけられたということですね。ですから、今日でもわたしたちの礼拝において、「奴隷の状態からの解放」という恵みにお互いを導いてくださる神さまに、解放された生き方が示された聖書をそのど真ん中に据えて、感謝をささげるわけですね。/そこで、神の前に献身のしるしである全焼のいけにえと感謝のしるしである和解のいけにえがささげられました。献身と感謝は、礼拝でささげられる今日でもふたつのささげものですね(1節)。

祝福とは何でしょうか？それは、平和がもたらされるということですね。民数記の6章24節以下に、「主があなたを祝福し、あなたを守られますように。主が御顔をあなたに照らし、あなたを恵まれますように。主が御顔をあなたに向け、あなたに平安を与られますように。」とありますね。その先には、「彼らがわたしの名でイスラエル人のために祈るなら、わたしは彼らを祝福しよう。」とあります。わたしたちが祝福されるのは、ここでも、主の名によってですね。それ以外ではありません。主の名が、わたしたちが祝福されるためのすべてですね。(2節)。

分け与えられたものは、喜びの祝宴を表わしています。コロナ禍で、礼拝後の愛さんの時を持てずにいますけれども、喜びの祝宴を分かち合いたいですね(3節)。

ダビデの時代の礼拝がそうであるように、わたしたちのささげる礼拝においても、奉仕に任命していただいたのは、お互いが、主のみ名を思い起こし、み名を告白し、感謝し、賛美し、ほめたたえるためですね。新改訳2017では、その御名を呼び、告白し、賛美するようにした。とあり、口語訳では、主をあがめ、感謝し、ほめたたえさせた。とあります。

本論2 神の出来事を再び物語ることで、神への感謝の念を呼び覚ます

神の箱は、契約の箱、あかしの箱などとも呼ばれます。サウル王の時代にはあまり顧みられなかった神の箱をダビデは、これを民と共に重んじるようになりました。この重んじるようになったということが何を意味しているかということ、それは、出エジプトという神の出来事を物語を再び物語っていくようになったということですね。わたしたちは、何を物語っているのでしょうか？

2

わたしたちが喜べないことがあることを重々ご存知であるお方が、絶えず祈ることがどんなことかを思い巡らしているわたしたちに、そして、とてもじゃないけど感謝などできないことにしばしば遭遇してきたわたしたちに、いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。と聖書は語り掛けますが、この三つのことは、ひとつにつながっていて、まさに三位一体ですね。これこそ、キリスト・イエスにおいて神がわたしたちに望んでおられることです。と。神がわたしたちのために望んでおられることです。とも受け止められますが。

金山長老が金婚式の時に50年を振り返ってもしもひと言で言い表すとしたら、にんててくださったのが、「感謝」でした。英子さんは「あわれみ」とおんててくださったのですが、この組み合わせが夫婦を結び合わせるものだなとしみじみと思わされます。ですから、60年の今年も、十年後の70周年の折しもそうなんじゃないでしょうか。2週間前に元一役員が収獲感謝献金の奨励で、コロナ禍の厳しい状況だからこそ感謝をささげることが促していただきました。無理をしないでくださいねとおっしゃることも忘れませんでした。感謝は礼拝に欠かせないものですね。

数世紀にわたって、数千の人々が辿り続けてきた旅に、「聖ヤコブの道」という巡礼の旅があって、生活上の問題や深い疲労感で気を滅入らせていた人たちが、そこから離れた、忙しい日常生活から離れた時間を過ごす機会となっているようですね。休息と回復の機会に主が御声を聴かせてくださる、主の御声に耳を傾けたいと望んで旅をするわけですね。歩いているうちに、主がくり返し、「感謝を」とささやいておられるのを感じとった方が、それは自分が期待していた、求めていたものではなかったにもかかわらず、それは、主が聴かせてくださった巡礼の旅の明確な答えだったというんですね。家族や友人、自身が直面している葛藤でさえ、これらに対する深い感謝の念が、心にしっかりと入り込んできた！気づかされたことは、「感謝」に眼が開かれると、最後には人生の喜びにわたしたちを導いてくれる！わたしたちが、この朝も導かれる祈りは、感謝の念を呼び覚ましてくださることを感謝します！ですね。それこそ、キリスト・イエスにおいて、神がわたしたちに、わたしたちのために、望んでおられることですね。